

はいくのはのじから

初心を忘れた俳人のために

その一

草子洗

はじめに

俳句をはじめること、あなたの毎日が変わっていくでしょう。

うれしいとき

かなしいとき

なにもないときでさえ、あなたの紡ぎだす言葉が偽りのないものなら、

それは俳句にとって、おおきな宝となります。

そして日本という風土をあらためて愛し、日本語のすばらしさ、

日本人の感性に出会うことでしよう。

この本がこれから俳句を詠むうえで、悩んだ時や困ったときに力となってくれることを願ってやみません

草子洗

準備するもの

俳句手帳

ポケットや鞆に入るサイズのノート、メモ帳ならなんでもかまいません。書きとめるときは、縦書きをおすすめします。

縦書きは一句の出来上がりのイメージが掴みやすく、のちに推敲しやすいでしょう。この句帳は外出するときも常に一緒に持ち歩くとよいでしょう。

外出先でひらめいた時、ひらめいた言葉など書き留めておく句作に役立ちます。

(月刊『角川俳句』や『NHK俳句』の四、十月号に俳句手帳の付録がついています)

歳時記

*携帯用に便利な文庫本サイズの歳時記

*角川が出版している大歳時記、これはすべての季語と傍題と丁寧な解説が載っています。

春・夏・秋・冬・新年

辞書

(携帯には電子辞書あるいはiPadなど)

お気に入りのペン

好きなものに囲まれていると気持ち豊かになります。

俳句とは

俳句は、五七五の十七音で成り立っています。

最初の五音を上句、次の七音を中句、最後の五音を下句、とよびます。あるいは、上五(かみご)、中七(なかしち)、下五

(しもご)ともいいいます。また上句を打出し、下句を座五とよんだりします。

忘れてならないのが、俳句は十七字ではなく、十七音だということ。俳句は五七五の字数ではなく、五七五のリズムがとても大事になります。

望郷の風荒るる日の蓬かな

水田光雄

これを字数にすると、

「ぼうきょうのかぜあるるひのよもぎかな」

と、上句が六文字になります。ですが俳句では、ぼうきょうの「きよ」を一つの音とみなしますので、「ぼ」「う」「きよ」「う」「の」で、五音です。

百日は忘るる月日さるすべり

水田光雄

この場合も同様に、上句「ひゃ」「く」「に」「ち」「は」で五音になります。

声に出して読み、リズムを頭でなく体で覚えましょう。

岩よりも暗し山椒魚の夜は

水田光雄

「いわよりもくらしさんししょうおのよは」

秋めくや書棚にいまも漂流記

水田光雄

「あきめくやしよだなにいまもひょうりゅうき」

このように、俳句は五七五のリズムにのってよむことが基礎になります。

他にも、「ピース」「ビール」などの「ー」である長音も一音とします。「ピース」は「び」「い」「す」で三音です。「やっぱ

り」「きつと」などの「っ」も同様です。「ひっそり」は「ひ」「つ」「そ」「り」の四音です。「ニュース」は「にゅ」「ー」「す」で三音になります。

字余りについて

字余りとは、上句が五音以上、中句が七音以上、下句が五音以上をさします。つまり全体が十七音を越えると「字余り」となります。

俳句は五七五のリズムにのって詠むものですから「字余り」のない方が音読しやすいわけです。ですが「字余り」でも上句だけ六音になることが許されています。中七と下五の音数は守ります。

字余りとなる場合、それが効果的にはたらいしていることが大切になります。

例句をみてみましょう。

ジャックナイフ錆びて八月十五日

水田光雄

上句「ジャ」「ッ」「ク」「ナ」「イ」「フ」で六音です。

この句の八月十五日とは、日本の終戦記念日のことです。戦争が終わり何十年も経ってしまった時間のはかなさ、この世の無常を、ジャックナイフが錆びたことに置き換えて詠っています。

八月十五日というメッセージ性を持つ季語にたいして、字余りになっている「ジャックナイフ」が一番はじめの上句におか

れていること。一句全体にインパクトを与えながら、絶妙なバランスを効果的に保っています。

中・下句のリズムが崩れていないので流れるように読むことができます。

グルコサミンコンドロイチン桜まじ

柘植史子

上句「グ」「ル」「コ」「サ」「ミ」「ン」で、六音になっています。ですが例句の場合は、六音でもリズムが良いです。「グルコサミン」から「コンドロイチン」へと、つづく歯切れの良さや韻をふんでいることで字余りを感じさせません。

リズムカルな世界にのったまま、春らしい暖かい風に包まれて読み終えることができます。

字余りの逆は**字足らず**です。一句が十七音に満たない句をいいます。しかし俳句は五七五が基本です。慣れるまでは字余りにならず、五七五を守って作りましょう。

例句も、五七五の基本的リズムが身についてこそ、字余りの効果を生かして詠んでいます。また字余りでも、中句・下句の音数は守って俳句を詠んでいきましょう。中七の音数が乱れると句全体が乱れてしまいますし、おとしどころの下五が字余りだったり、字足らずだと、まとまりがありません。

中句が字余りになった例です。

△鳥つつき**雪だるま重く**溶けにけり

草子洗

中句「ゆ」「き」「だ」「る」「ま」「お」「も」「く」で八音になっています。

修正してみました。

○鳥とまり**透きとほり**ゆく雪だるま

草子洗

次は中句が六音で、字足らずです。

△背面に**愛と平和**雪がふる

草子洗

修正すると、

○雪が降る**愛と平和**の文字を背に

草子洗

五七五のリズムを体感するため、自分の好きな句は声に出して、繰り返し読むといいでしょう。

季語について

季語は、その季節感をあらわす言葉です。

日本人の感性は春夏秋冬の四季によって、育まれてきました。わたしたちはこの国に生まれたときから、四つの季節を何度もめぐって生活してきています。わたしたちは生活の中の、あらゆる季節を表すものに囲まれて暮らしていて、俳句はごく当たり前の日常を詠む世界です。

くわえて十七音と少ない。言葉が制限されるために、五七五のリズムと、目の前の一瞬一瞬を切り取って詠むことが重要になります。言葉の実質以上に、詠おうとするわたしたちを助けてくれるもの、それが季語です。

季語は、後述する「切れ」とともに、俳句にとって命といえます。ですが膨大な量の季語を暗記することはありません。

はいくのはのじから

初心を忘れた俳人のために二

その二

草子洗

歳時記は句作の伴侶

俳句にとって欠かせない季語をあつめたものが歳時記です。

歳時記に載っている季語は旧暦に基づいて記載されています。

春 立春（二月四日頃）から立夏前日まで

夏 立夏（五月五日頃）から立秋前日まで

秋 立秋（八月七日頃）から立冬前日まで

冬 立冬（十一月七日頃）から立春前日まで

新年 正月に関する季語

新暦（太陽暦）のカレンダーでは二月はまだ冬ですが、旧暦では立春がくれば春ですので、この辺りから春の季語を使って俳句を作っていきます。

季節を先取りし迎えるつもりで詠んでいきましょう。そうすることで、時候に敏感になり、ちよつとした季節の変化が喜びにかかります。その気持ちから俳句にとって力となります。

これから、春夏秋冬の季語を使った例句をもって解説していきます。ですがご自分の感性や直感を大事にしてください。

四季について一般的なセンスではなく、あなたがこれまで歩

んできた人生の中で、いくつもの春夏秋冬がめぐってきたはず
です。知らず知らずのうちに、あなただけの「春」「夏」「秋」
「冬」という感性が育っています。その感性を大事にしなが
ら詠んでいきましょう。

そして、歳時記をひらき未知の季語に出会うとき、あなたの
なかで新しい四季がうまれるのです。

春の季語を使うとき

春の季語を使って俳句を作るとき、春という季節の特徴をた
だしく理解してはいたくありません。これは、春の季語ひと
つひとつの意味を知ることにつながります。

では、春とはどんな季節でしょうか？

冬の寒くつらい時期を過ぎ、雪は溶け清冽な水が流れ出し、
ものの芽が一気に芽吹く、いのちの喜びにあふれる時です。

春の季語ひとつひとつにその意味がこめられています。

それぞれの春の季語に象徴される意味・思いを理解し、俳句
を詠むときに上手に活用していくのです。

例句をみてみましょう。

黒髪の句ふ雛市日和かな

水田光雄

この句の季語は「雛市」です。

三月の節句に飾る雛人形や雛道具を売る市のこと。あるいは、
そのデパートの売り場です。我が子か親戚の子か孫に雛人形を
買うために売り場にやってきた時のことを詠んでいます。

雛市日和ということから、天気も良く買うのにふさわしい日のようです。

「雛市」という季語には、雛人形を選ぶ楽しさ嬉しさ、また選ぶ人たちの賑わう様子まで伝えることができますので、そのことについては敢えて、五七五に表わす必要はないわけですから、加えて「雛市」に「日和」を足しているのです、これ以上のめでたさはないということが分かります。

「黒髪の匂ふ」はお雛様の黒髪でもあり、雛人形をえらぶ若い母親の黒髪でもあります。実際には黒髪はつややかに輝いています。「匂ふ」程度に抑えていることで「雛市日和」の意味・思いともぶつからずに、句全体を引き立てています。

季語の意味・思いを理解すれば、例句のように、当たり前のことをシンプルに、かつ詩情ゆたかに詠むことができます。

母が来る並木のさくら吹雪く中

栗山政子

この句の季語は「さくら吹雪く」です。落花、散る桜、花吹雪などとも言います。桜は古来より、日本人の感性を育んできた花です。蕾から満開、散る姿まで、その移ろいゆく姿にわれわれは春を待ち、喜び、惜しんできました。華やかさだけではない、桜だけが持つ感傷的な世界もあります。日本人が最も愛する花、日本人の感性をあらわす花、それが吹雪くように散ってゆく。桜の咲く姿が華やかだからこそ、散りゆく姿を惜しむ。散るさまがこれほど美しい花もほかにないでしょう。栄枯盛衰に重ねて無常感が漂います。それが「さくら吹雪く」の季語に

こめられた思い、意味になります。

例句は、母が自分のもとへ歩いてくる様子を詠んでいます。花の中の花である桜にその姿を見ていることで、母への感謝と深い敬愛を感じさせます。満開の景色より「さくら吹雪く中」という劇的な絵を捉えていることで色彩も鮮やかであり、同時にどこか切ない印象もうけます。「さくら吹雪く」という季語を生かしながら、母への愛と老いてゆく親への複雑な思いを感じさせる句になっています。

春の花なら何でも合うというわけではありません。「さくら吹雪く」の季語の意味をよく知った上で詠まれています。

夏の季語を使うとき

夏は、どんな季節でしょうか？

春が過ぎると、一気に暑くなります。湿度もあがり、じめじめしますね。一方で、木々の緑は濃くなり、生き物は活発になり、空には入道雲も。涼を求める日本人独特の感性が随所に光る時季です。また、じめじめして暑苦しい夏にこそ美味しく感じる食べ物もあります。

歳時記をひらけば、これら夏の特徴を象徴とする季語がずらりと並んでいます。

例句をみていきましょう。

蜥蜴の尾きらきらと地を流れけり

水田光雄

季語は「蜥蜴」です。

この俊敏な生き物は、夏にもっとも生命力溢れた存在となり、捕まえるのが困難です。その姿は爬虫類に特徴的な容姿をそなえていて、小さいため可愛らしさや愛嬌も感じさせます。それが蜥蜴・蜥蜴の尾という季語にこめられた意味、思いになります。

例句は、一瞬でとらえた蜥蜴の姿を的確に詠んでいます。「あつ蜥蜴だ」と、気付いた瞬間には、視界の端へと蜥蜴は姿を消して、蜥蜴の尾しかとらえられません。呆然として残された人間の姿を面白く感じます。

蜥蜴の動きが素早いことは、わざわざ述べなくても、蜥蜴という季語に含まれていますので、例句ではそのことを改めて伝えていません。ですが、見たまま、自分におこったことをそのまま述べているだけの「だから何？」という俳句でもありません。

蜥蜴をとらえていながら、蜥蜴の「尾」に限局したこと、気味の良いものとはいえない蜥蜴の尾に対して「きらきら」という表現を使っていること、蜥蜴の走り去る姿を「流れ」としたこと、夏の輝かしさを無言で伝えているのと同時に、夏に生きるものの鮮やかさを表しています。

雨粒のいきなり太る大暑かな

つげ幻象

季語は「大暑」です。二十四節季のひとつ、暑さがいちだんと厳しくなる頃です。夏の盛りの力強さを感じさせます。それが「大暑」に込められた季語の意味、思いになります。

例句は、盛夏の時期の雨を詠んでいます。事実をありのままに詠んでいるだけでも関わらず、読み手を感動させるのは何故でしょうか。

俳句は、感動の瞬間を切り取る文学です。例句は、見事にそれを成功させています。雨粒が「いきなり太る」という誰もが見ていながら見ていなかったことを瞬時に切り取っています。この一文だけで「大暑」の時季の雨の感触、音まで伝わってきます。また「大暑」に見られるように時候をあらわす季語は、世界観が漠然としているため、逆に、例句のように限局したものと合わせて詠むと、句に奥行きが生まれてきます。

水打つて動かぬものを動かしぬ

村井文美

季語は打水、水を打つです。暑さを和らげるために庭や玄関先の通りに水をまくことです。水をまく音を聞くだけでも涼やかな気持ちになります。真夏に涼を求める日本人の感性がよくあらわれている季語です。

例句は、水打つて「動かぬものを動かしぬ」とあります。暑さがつづくこの時季は、風はそよとも吹きません。在るものには在る姿のまま、人間も動物も、少しでも動けば暑くなるためにほかの時候に比べ、動こうとしなくなります。例句は、そんな真夏の特徴をよく捉えて詠まれています。「動かぬもの」を物理的に動かそうとしているわけではありません。

水をまき、涼を作り出すことで、暑さで滞ったわたしたちのものをみる目を、和らげ動かそうとしているのです。

はいくのはのじから

初心を忘れた俳人のために

その三

草子洗

秋の季語を使うとき

秋の季語をみていきましよう。秋とはどんな季節でしようか。夏が過ぎ、日中もすごしやすくなる頃が秋です。夜は長くなり、空気が澄むため月が一番うつしく見えるときです。いろいろな植物の実が実り収穫の時期であり、それは人間の味覚を楽しませるとともに、冬眠前の動物たちの命をも助けます。月や虫の音を愛でながらも厳しい冬がくる前に備える季節でもあるのです。

吉日と結ぶ一文豊の秋

水田光雄

季語は「豊の秋」です。特に稲のよく実ったこと、豊年を表しています。

この「豊の秋」には、それまでの稲作をねぎらう気持ちと、労の報われたよろこび、安堵感。神への感謝の意がこめられています。上句と中句は、「吉日と結ぶ一文」ですから、祝事の報告をしたためていると思われます。

祝事へのよろこび、めでたさを「豊の秋」という季語にのせて伝えているわけです。文をしたためている嬉しそうな表情ま

でも見えてきそうです。

例句は「豊の秋」という季語でなくては成立しないでしょう。「吉日と結ぶ一文」という何気ない行為を「豊の秋」という季語を合わせることで特別なものに仕上げています。

啄木鳥の音あをぞらへ階をなす

栗山政子

季語は「啄木鳥」です。けら、とも呼びます。一種類の鳥を指すのではなく、キツツキ科の総称になります。留鳥で一年中、目にすることができませんが、姿や鳴き声よりも、秋の澄んだ空気に木をつつくドラミングの音色が印象的です。木をつつくドラミングは、巣穴を作るため、木の皮にいる虫を食べるため、コミュニケーションのため、と用途はさまざまあるようです。

例句は、「啄木鳥」と詠まずに、「啄木鳥の音」と捉えています。これは、「啄木鳥の音」とした方が「啄木鳥」をとりまく世界まで伝えることができるからです。「啄木鳥」をとりまく世界が伝わると秋の空気が伝わります。秋の空気が伝わると澄んだ空が見えてきます。澄んだ空が見えてくると、「啄木鳥」の木をつつく音が「階をなす」ように「あをぞら」を渡ってゆくのが聞こえてきます。

秋の空気、大気の特徴をよく生かして詠まれています。

塵取の塵に秋日の差しみたり

塩見明子

季語は「秋日」です。あきび、と読みます。秋の一日をさしたり秋の陽の光をいうこともあります。前後の文脈で解釈していきます。例句は後者の意味です。「秋日」ときいてどんなイメ

ージを持ちますか。秋の陽の光とは他の季節とどのように違うのでしょうか。塵取に塵を集めるのは年中やっていることです。春夏秋冬の陽が塵にはさすのです。春の陽がさす塵はどんな感じでしょう、また夏の陽が塵にさすのはどんな色ですか。冬は？そうやって考えていくと春には春らしい陽光の特徴があり、夏には夏の陽光の特徴があり、冬には冬の陽光の特徴がありますから、同じ塵を詠むとしても詠み方がまったく変わってくるのです。また秋という空気の一段と澄んでいる時季だからこそ塵がきらきらかがやいて見えます。

その季節の世界を体で感じ取り、季語をひとつひとつ大事に扱って詠んでいきましょう。

冬・新年の季語を使うとき

冬はどんな季節でしょうか？

冬は、寒さが一段と厳しくなり暖を求める季節です。ものはみな枯れていきますが、枯れるさまも風情があり、だからこそ春を迎えたときのよろこびもひとしおです。また、雪景色のうつくしきは古来、日本人の感性を育ててきました。

新年は、年の初めのめでたさと今年一年を祝う、よろこぶ季節です。

婚の日や太平洋に冬日満ち

水田光雄

季語は「冬日」です。

冬日に照らされた海が、読んだ瞬間にきらきらと輝いて、眼前にひろがります。婚礼を喜ぶ気持ちやさしく伝わってくる

句です。

婚礼が明るくめでたい分、春や夏、秋の季語では、婚礼とぶつかってしまい、季語も祝事も生きてきません。春でも夏でも秋でもない、冬日という寒い時期のまぶしい暖かさが、婚の日という言葉をいきいきと際立たせています。

大根煮る鍋にゆふぐれ来てをりぬ

田中まり

季語は「大根」です。だいこにる、とここでは読みます。大根は他の食べ物の味を引き立てたり、それ自身もいろいろな味が楽しめます。生食や煮たりしても味が変わり日本人の食生活に欠かせない食べ物です。今では年中見かけることができますが、やはり大根といえば冬でしょう。旬のものは旬に食べてこそ美味しく感じます。例句は大根を煮ている様子を詠んでいます。大根を煮るとき、だしの風味や煮汁が時間がたてばほどしみこんでゆくのが特徴です。味がよくしみた大根は、箸で割ればほろと崩れ、おいしそうな湯気がたちます。また煮込みに時間がかかりますから忙しい朝から大根は煮ません、やはり夕餉のイメージです。ですが例句はわざわざ夕餉の支度に大根を煮ているとは言っていない。「ゆふぐれ来てをりぬ」と擬人法が使われています。冬のゆふぐれの色、匂い、世界観。どんなイメージを抱きますか？寒いなか、もうすぐ家族が帰ってくる、自分の夕餉を待つ人がいる。ことごと大根の煮える音、一種の静寂のなかにさまざまな思いが巡ります。煮汁の色と、ゆふぐれの色が重なります。味がしみるほど煮込むには時間がかか

り、その時間の経過を「ゆふぐれ来てをりぬ」と言い換えて表現しています。同じ根菜でも、大根でなくてはこの「ゆふぐれ」と合わないでしょう。

門松の横綱級を立てるたる

水田光雄

季語は「門松立つ」です。「歳神」を迎える依代（よりしろ）として各家の門口にたてる松のことになります。昔は「事始（ことはじめ）」の日に山から伐りだされ、それを鷹職人たちが各屋に立てていたそうです。だいたい二十日過ぎに立てていた、と言われています。門松はお正月の間、家に歳神さまを迎える依代ですから、毎年のものであっても手抜きをしません。

例句からは、そんな家族の健康と幸せを願う思いが「横綱級」という言葉になって表れています。門松を立てる行為自体に祝う気持ちがおこめられていますから、そのことについては敢えて述べず、「横綱級」とたとえることで極めて客観的に新年を迎える喜びをたたえているのです。門松を立てるといふ毎年当たり前の行為でも、ご自身の感性で見つめれば、ちがうものの方、あらたなものの方が見方が生まれ、俳句がいきいきときます。

筆立に孔雀の羽根や春近し

山崎ひさを

季語は「春近し」です。春待つ、という期待だけの季語に比べ、実際に自然の中に春の気配を感じつつ、春を待ちわびるといふ思いがあります。その意味をよく理解した上で例句を読むとどうでしょうか。

「春近し」で読み終えた瞬間、孔雀の羽根の色が一気に鮮や

かに視界に残る感じがします。机上で外の景色を眺めているのかもしれない。冬を知る者にとって、春を待つ気持は格別なものですね。それが外の木々や風、景色に感じられるようになる。

春待つという主観の季語より「春近し」という実感できる季語によって、読み手も作者とともに春の気配を感じるのです。

俳句を作るとき、わたしたちは、いつもものを見つめる目を新鮮でピュアにしておく必要があります。好きな絵、好きな映画、好きな音楽、好きな香り、おいしいものなど五感を喜ばせる何かにも触れて生活しましょう。人間は、たくさんの感動を経験するために生まれてきました。その感動の瞬間を切り取ったものが、俳句なのです。

季重なるのタブーについて

季重なりとは、一つの句の中に季語が二つ、あるいはそれ以上使われていることを言います。原則として、一つの句に季語はひとつ、と決まっています。それは何故でしょうか。

これまでも述べてきたように、俳句は五七五〥十七音という限られた字音数の中で、詩情ゆたかに詠わなくてははいけません。そのため、ひとつの季語がもたらす世界観が、一句にいのちを吹き込むのです。その季語が二つ以上あつては、二つの世界がぶつかり合い、句全体が支離滅裂となり、伝わることも伝わらなくなってしまう。

季重なるの名句もありますが、慣れるまでは一句一季語で作っていくみましょう。

はいくのはのじから

初心を忘れた俳人のために

その四

草子洗

切れについて

俳句における「切れ」とは季語と同じく、俳句にとっていちです。「切れ」「季語」なくして俳句は成立しません。これが川柳・標語・キャッチコピーと大きく異なる点です。「切れ」「季語」があり、五七五のリズムにのせてこそ、俳句といえます。今、この感動の瞬間を切り取るために、切れや季語が必要になるのです。

ではなぜ「切れ」が必要なのか具体的に解説していきます。

切字「や」を使った切れ

立秋や／雲より長き橋渡り

水田光雄

生節や／太平洋に風荒び

夏草や／死後を相寄る俘虜の墓

秋めくや／書棚にいまも漂流記

このように切字「や」は、句の途中に使われることがほとんどです。

生節や／太平洋に風荒び

水田光雄

この句から切れを失くしたらどうなるでしょうか。

生節に|太平洋の|風荒び

生節の|太平洋に|風荒び

となります。どんな印象をうけますか？原句の切字「や」を使った切れのある俳句では、上句の生節やと、中句下句の太平洋に風荒びの間に深くおおきな空間があります。

生節を作っていることと、風荒ぶ太平洋は、それぞれ独立した別の世界です。このふたつをつなげているものは、作者の感性になります。その箇所が「切れ」であり「間」になるのです。この「間」に、言葉に表わされていない「作者の世界、感性」が隠されています。五七五という限られた字音数の中に「切れ」る場所をつくることによって空間・隔たりを作り、一句にひろがりやと奥行きをもたらし、それが詩情にかわるのです。

立秋や／雲より長き橋渡り

水田光雄

この句の立秋と、雲より長き橋渡り、は近からず遠からず別の世界です。秋ですから、ものはみな澄みわたっています。空を流れる雲も澄みわたっているため、その全貌が美しく見渡せます。そのため渡らんとする橋が雲より長いことに気付く。ここで初めて秋の訪れを感じているのです。立秋と、雲より長き橋渡りの間を切っている「間」に「作者の言葉にしない心」があり、秋の訪れを感慨深いものに仕上げています。

この例句から切れを消去したらどうなるでしょうか。

立秋の|雲より長き橋渡り

(切れなし)

だらりとした締まりのない印象をうけますか？散文的で切

れがないために奥行きがありません。

立秋の雲より長き橋渡る／（切字を用いない切れ）

これは「渡る」という動詞の終止形を用いた切れです。ですがこの句の場合、最後に切れを用いると、立秋という季語が生きてきません。ほかの秋の季語でもあてはまってしまう恐れがあります。

他の季語でも成り立ってしまふことを季語が動くといいますが、このように季語が動く句は良くありません。立秋を使った意味がなくなるからです。一句に使う季語は唯一無二です。

立秋という季語を際立たせ、雲より長き橋渡りという行為をうつくしい絵のように見せるためには、立秋や、で切るのが最も効果的といえます。

切れは季語を生かしても殺しもあります。つぎの例句をみていきましょう。

少年に男の顔や／星流る… 栗山政子

例句は句の途中で切字「や」を使った切れです。季語は、「星流る」。この句を単純な日記風にすると、「星が流れると、少年の顔は大人びて見えた、男らしい顔つきに変わった」です。

ただ俳句は感動の瞬間を切り取った文学ですから、このようにだらりと時間の流れ通りに言葉で説明してはおもしろくもありません。

俳句は鮮度が大事ですから過去のことで、今日の前で、この瞬間おこったかのように詠みます。

では仮に、時間の流れ通りに見たままを詠むと

星流る男の顔の少年に（なった）

星流る、で切れて中・下句に続いていきます。ですがこれでは原句のような感動がありません。なぜでしょうか。

原句の感動のポイントは、少年の顔を男の顔たらしめたものは何か、ということです。もちろん、「星流る」ですが、数あるわたしたちの生活や季語のなかに、少年の顔を男たらしめるものは沢山あるでしょう。

つまり「星流る」は漫才でいうオチ、落語でいうサゲ、にあたる部分ではじめにオチを言ってしまうと、この句の場合はあるりきたりの陳腐な句になってしまいます。俳句には瞬間性が必要ですので時間の流れ通りに詠もうとしないことです。詠みたい、心に響いたものを切り取ってみます。

ここでは「星流る」「男の顔になった少年」です。これを過去形ではなく、今日の前でこの瞬間におこったこととして言いかえます。

星流る少年に男の顔（あらわる）

そして「星流る」は前述したようにオチにあたりますから、最後にもってきます。

少年に男の顔（あらわる）星流る

さてここで、男の顔（あらわる）ですが、あらわる、まで言葉にする必要があるかどうかです。あらわれた、そのように見えた、ことに感動していますから敢えて言葉にする必要はない

と思います。

少年に男の顔や

ここで切字「や」を使って切ることと言葉に表わさない作者の感動（男の顔あらわる）が介在し、「星流る」までに深く大きな空間がもたらされます。

少年に男の顔や・・・星流る

星流る、のオチに辿りついて初めて少年の顔が大人の男の顔になったのは星が流れるのを見たからなんだ、という余韻をわれわれ読み手にもたらすのです。

切字「や」は句の途中で使われていますが、「星流る」の季語を十分に生かす箇所に使われています。切れは空間をもたらしとともに、季語を生かすものでなくてはなりません。

次の例句です。

鈴虫の夜や／薄雲の剥がれゆき

栗山政子

季語は「鈴虫」です。秋の夜に美しく鳴きますから、鈴虫自体に秋の夜のイメージは内包されているとっていいでしょう。ではなぜ「鈴虫の夜」としているのでしょうか。

仮に例句を「鈴虫」で切った場合は

鈴虫や／薄雲の剥がれゆく夜

鈴虫や／雲うすらいで剥がれゆく

となります。随分と印象が変わります。

鈴虫と空の様子が今ひとつつながりにくく、かえって詰め込みすぎている感じになってしまいました。

鈴虫と局限して詠むより、「鈴虫の夜」とした方が、景色にひろがりが生まれるのが感じてもらえますか？

鈴虫といえはその美しい音色ですが、例句は音色と空の色が一体となってくる美しさがあります。鈴虫の鳴き声が聞こえる景色のなか、薄い雲が剥がれるように流れて、金色の月があらわれます。この景色を月を季語として詠む、あるいは鈴虫を季語として詠む、と色々手法はありますが、「鈴虫の夜」としていいことで視野がひろがっていきます。「鈴虫の夜」全体から、「薄雲の剥がれゆく」という心にひびいた景色を切り取って伝えていくのです。

そのため「鈴虫の夜」で一度切ること、「薄雲の剥がれゆく」の景色との間に深い空間を生み出しながらも、この二つの景色をそう遠くない距離でつなげていきます。

本来なら、鈴虫の音色・秋の夜空を流れる絹のような雲・雲が流れたあとにあらわれた金色の月を伝えたかったはずですが、俳句という世界最短の詩に伝えたいことを全て表現すると詰め込む形になってしまい読みにくくなります。加えて、作者の伝えたいことが読んで全部わかってしまったら、面白くないと思いませんか？言葉にあらわされていない部分と、切れにみられる作者の感性の「間」、ここを読み取ることも、俳句の味わいといえます。俳句は全てを詰め込んで色気を失う、と覚えてください。言葉にしないうれしさ・悲しさは必ず伝わっていきます。

はいくのはのじから 初心を忘れた俳人のために

その五

草子洗

切字「かな」を使つたきれ

(a)望郷の風荒るる日の蓬かな

(b)島一つ暮れ残りたる網戸かな

(c)立ちてすぐ味方の欲しき案山子かな

(d)一本の葱の立ちたる厨かな

水田光雄

” ” ”

四句を読んでみてどんな感じをうけますか？

一息に読み下ろす、最後までとまることなく滑らかに読み終える、そんな感じがしませんか。

小細工なしにすつきりと言いつえ、言いつえたとに爽やかな余韻をのこす。これが切字「かな」の特徴です。

(a) (b) (c) (d)の例句ですが、

(a)の「望郷の風荒るる日の」は「蓬」にかかっています。

(c)の「立ちてすぐ味方の欲しき」は「案山子」にかかっています。

ます。

(d)の「一本の葱の立ちたる」は「厨」にかかっています。

ですので、この三つに関しては読んですぐ意味がわかると思

います。

(b)はどうでしょうか。

「島一つ暮れ残りたる」と「網戸」はつながっていますか、いませんか。

これは「島一つ暮れ残りたる」は「網戸」にかかっています。暮れ残る景色と網戸は別です。

島一つ暮れ残りたる網戸かな

水田光雄

つまり、この句は点線のところで、かるく切れていて、網戸かな、ではつきりと切れています。

「島一つ暮れ残りたる」と「網戸」の間に、空間をつくり句全体にひろがりを持たせています。

かるく切らせていることで、作者の夕をみつめる心を挟み、余情を滲ませているのです。

このように切字「かな」は、

上・中句

+

一番伝えたい

+

かな

下

句

と

下

句

下句とは近くも

+

上・中句とは近くもなく

+

かな

なく遠くもない別の句

速くもない別の句

の作り方にわけられます。

前者が最もよく使われる詠み方で、一番終わりに深くおおきな余韻を残します。

後者は、句の途中でかるく間をつくり、下句でややちがう世界へ連れてゆき余韻をのこすやり方です。

この場合、かるく切るだけなので、切字をつかった切れは用いず、もっとも切れの効果のやさしい、体言止めや動詞の終止形をつかいます（切れの強弱は後述します）

後者の作り方のわかりやすい例句です。

彼方より馬走りくるさくらかな／

徳永芽里

点線のところでかるく切れていて、さくらかな、ではつきりと切れています。「彼方より馬走りくる」の景色のあとにかかる空間がうまれ「さくら」が満開の世界へと変わります。

おそらく桜の中を馬が走ってきたのですが、馬走りくる、で一度かるく切ることで、景色がさらに広がり、桜の華やかさが生き生きと見えてきます。

句の途中の弱い切れの間にも作者の感性は生きています。

棒鱈の乾ききつたる虚空かな／

田中まり

「棒鱈の乾ききつたる」と「虚空」は近からず遠からず別の世界です。ここでも点線の箇所でかるく切れていることで棒鱈から冬の空へと大きく景色がひろがってゆきます。

かるく切れているからこそ「虚空」に託した作者の心が伝わってくるのです。

切字「けり」を使った切れの強弱

(a) 冬薔薇の絶好調を剪りにけり／

水田光雄

(b) 白鳥に水といふ座の生まれけり／

〃

(c) 鶺鴒待つ闇夜の水の澄みにけり／

仲 栄司

(d) 山桜やまごと花となりけり／

草子洗

切字「や」「かな」について述べてきました。

切れの強度は、弱い順に、

「や」↓「かな」↓「けり」となります。

例句を読むと、「けり」を用いた句は、まるで時代劇で武士が読みあげているような文章です。それだけに「けり」の切れは強く、断定的に言いきっています。白黒はつきりと言いきっていることで句にメリハリをつけ、一句全体を鮮やかにしています。これが切字「けり」の特徴です。

例句の(a)(b)は同じタイプの作り方です。切れは斜線の部分一か所です。

(a) 冬薔薇の絶好調を + 剪りに + けり

→

上・中句は下句に + この句の + けり

かかる ← 一番のもりあがる

← 箇所

(b) 白鳥に水といふ座の + 生まれ + けり

〔けり〕は断定的に強く言いきること、句が鮮やかになる、肯定の美学)

(c) (d)は点線でかるく切れ、斜線ではつきりと切れています。やはりここでも、かるく切る所は切字「や」「かな」のようなあきらかな切れ方はせず、切れの効果の弱い体言止めや動詞の終止形を使っています。

切れを二か所作るときは、弱い切れと強い切れで作ります。季語が二つ使われないのと同様に、同じ強さの切れが何か所もあるとブツリブツリと句が切れ切れに感じ、まとまらなくなります。分裂してしまい伝わるものも伝わらなくなるのです。

(c) 鶺鴒待つ^{終止形} 闇夜の水の澄みにけり／ 仲 栄司

→ 中句と近くもなく十上句と近からず

← 遠くもない世界

← 遠からずで一番もりあがる箇所

十 けり

(d) 山桜^{体言} やまご^と花となり^にけり／

草子洗

(c)は日記風に言うと、

「私は今日、夜の鶺鴒を楽しみに待っていました。その時、川の水は夜にもかかわらず、秋なのでとても澄んできらきらとしていました」となります。

作者が伝えたいのは、鶺鴒を待っているときのドキドキ感と、闇夜にあってでも秋の水が澄んでいることが分かったというも

のです。

滅多に経験できない鶺鴒観賞への期待と、澄んでいる水は作者の心を介して、共鳴しています。この二つは本来独立した別々の世界ですが、作者の心が介在することにより、近からず遠からずの関係を持ち、一句を際立たせるのです。

俳句というものは、感動を伝えるため過去のことであったも、あたかもこの瞬間、目の前でおこっているかのように詠みます。

俳句はなによりも鮮度が大事なのです。

鶺鴒待つ、ここで一度かるく切ることで空間が生まれ、作者の鶺鴒への思いが伝わってきます。そして闇夜の水の澄みにけり、とつづく。

闇夜の水が澄むのは秋だけでしょう。澄みにけり、と最も強い「けり」を使い、一句全体が一気に鮮明になってきます。楽しみに待っていた、待つ間ドキドキした、感動した・・・などなど敢えて言葉にせずとも、鶺鴒待つの後の切れに作者の心は潜んでいますから、その気持ちは十分に伝えられ、闇夜に澄む水に、作者の心、鶺鴒が共鳴しているのです。

季語の意味を正しく理解し、切れに強弱をつけることで単なる日記が、シンプルかつ詩情ゆたかな俳句へと変わるのです。

はいくのはのじから

初心を忘れた俳人のために二

その六

草子洗

切れの強さの順番について

切れの強さに順番をつけると、

- ① けり
 - ② かな
 - ③ や
 - ④ 動詞・形容詞
 - ⑤ 体言
- となります。

一句に切れの強弱は必要ですが、一句に切れを二つ使う場合、切字「けり・かな・や」を同時に使うのは、避けてください。切字だけに、切れていることがはっきりと伝わるためです。句が分裂します。

動詞の切れ

パンジーの一株を足し円生終止形まる／

「生まる」という動詞・終止形の切れです。

この句の切れはここ一か所だけです。生まれる、という言葉

水田光雄

使うのは非常に難しいといえます。安易に使えば安っぽくなりますし、余りに直接的だと重くなりすぎるからです。

例句は成功しています。円がぼつとできあがった感覚が、生まると切っていることでよく伝わってきます。切れの後から来る余韻に、作者の喜びも伝わってきます。

大鈴を見上ぐ／われらの空澄連用形みて

草子洗

この句は句の途中に動詞・終止形の切れを使っています。

ふつうの文章にすると、「大鈴を見上げてわれらに空澄みぬ」です。しかし、これでは感動が伝わりません。俳句は何度もいいますが、感動の場面場面・瞬間瞬間を切り取る文学です。

大鈴を見上げたこと・見上げたときの秋空のうつくしさを、切り取り、「見上ぐ」と切ることで、ここの「間」に作者の意志のようなものが隠されています。

澄んだ空は、大鈴の向こうにひろがり、見上げた者たちの純粋性を後押ししているのです。いわば空もわれらの一部のような感覚であり、「われらの」となっています。

動詞の切れのみで、切字を使った強い切れは使っていませんから、下句の動詞は終止形よりやや弱い連用形になっています。

特急に飛び乗る／芹の香り抱き連用形

草子洗

「飛び乗る」で切れて、間とリズムをつくっています。ここで切ることで、「芹の香り抱き」までに読み手にさまざまドラマを連想させています。この句も、終止形が一番強い切れになっているので、下句は終止形よりやや弱い連用形にします。

同じ強さの切れは、一句の中に使わないようにします。同じ強さの切れが何か所もあると、一句が完全に分断されてしまい、詩情がなくなってしまう。

例句のように、切れを数か所使う場合は、切れに強弱をつけましょう。切れで強弱をつけない場合は、句中の意味をもって強弱をつけましょう。余韻がのこり、読み手に想像をふくらませます。

茎立や／人は地球を掘り返し…

栗山政子

この句の一番強い切れは「茎立や」です。この切れが最も強いので次にくる切れは弱くします。「掘り返し」という動詞の連用形が使われています。「掘り返す」という終止形よりやや弱い切れになります。

「や」というはっきりとした切れを使っていますから、「や」と同じ強さの切れは使わないようにします。この場合の「や」と同じ強さの切れは、「かな」になります。「けり」は、切字でもっとも強い切れですが、「や」と一緒に使うことは避けましょう。

かげろふや／声出して声立て直す…

栗山政子

この句の一番強い切れは「かげろふや」です。

今回は句全体にメリハリをつけるために、次に来る切れは「かげろふや」より弱い動詞の終止形「立て直す」にしています。

終止形か連用形にするかは、たくさん句を作り、他のたくさん句の句を読むうちに自分の中に感覚として備わってきます。

形容詞の切れ

年輪の端に腰かけあたたかし／

つげ幻象

この句の切れは二か所です。「腰かけ」でかるく切れていて、「あたたかし」で強く切れています。

年輪の端に腰かけるといふ現代人の日常とは異なる行為に詩情が漂います。「あたたかし」と言い切っていることで、言葉にされていない春の日差しが見えてきます。

あたたかい、という形容詞の終止形は「あたたかし」。形容詞では一番強い切れです。連体形「あたたかき」連用形「あたたかく」の順に弱くなります。

岩よりも暗し／山椒魚の夜は

水田光雄

句中に形容詞「暗い」の終止形「暗し」の切れです。切れはここ一か所だけです。形容詞・終止形の最も強い切れを使っています。

散文にすると「山椒魚の夜は岩よりも暗い」です。

ですがこれですと平易なままで俳句になりません。作者の心を打ったものは「岩よりも暗し」です。ですからここで一度強く切り、「山椒魚の夜は」でドラマティックに仕上げています。

体言の切れ

切れの中で最も弱い切れになります。弱いからといって効果がないというわけではありません。弱い分、季語との組み合わせ

せ・言葉のリズムの調節・他の強い切れとの併用ができます。例句をみてみましょう。

百日は忘るる月日／さるすべり

水田光雄

北口へ別るる出口／秋の雷

吉日と結ぶ一文／豊の秋

実柘榴の噴火寸前の口元

まつすぐな風の来る日の豆の花

一、二、三句目は中句で強く切れて、下句で弱く切っています。途中強く切ることは一呼吸置き、季語を生かす形で終わっています。百日は忘るる月日・北口へ別るる出口・吉日と結ぶ一文、これら上句中句はそれ自身に诗情があります。定型にするだけで詩になることがよく分かる上句中句です。そして落とし所の下句にある季語たち。上句中句にある世界が季語を生かしているのが分かってもらえますか？良い言葉や文章を作っても季語を殺しては俳句にはならないのです。切れに強弱をつけるのはこのためなのです。

四、五句目は、読み下ろすようにして下句で切っています。季語を主役にしつつ潔い詠み方をしています。

次に、切字「や」と体言の組み合わせです。「や」が最も強く体言は弱くなります。強弱の切れの組み合わせです。

例句をみてみましょう。

秋風や／まだ新しき母の骨

水田光雄

郭公や／石に座れば石が舟

栗山政子

青梅雨や／森に喪服の五六人

〃

これも、前述したように中句下句が上句の季語を生かしながら诗情があります。「や」で季語を切つてはいますが季語が浮いていません。この例句は本来一つの世界だったものを、切ることで余情をつくりだし、お互いを支え生かしあっています。そして体言で弱く切っていることで多くを語っていませんから、余韻も作りだしています。

最後に、動詞の切れと体言の組み合わせです。

動詞が強く体言が弱くなります。

例句をみてみましょう。

どこまでも歩いてゆける／蕎麦の花

神戸美沙子

酔ふ人とゆらゆら帰る／すいぢちよん

久木すいか

黒板の地図うごきだす／稲光

草子洗

動詞の終止形の切れは、普段私たちが話している言葉と近いので親しみやすさがありますが、切れ字を使った分かりやすい切れではないので、連体形と勘違いしないように句全体を感じながら読む必要があります。例句は斜線のところで強く切れていて下句の体言で弱く切れています。

以上、三回にわたり切れについて述べてきました。

切れとは「間」であり、言葉に敢えて表さない「作者の心・感性の居場所」になります。さまざまな切れを理解した上でご自身の句など読み返すとまた面白いかもしれません。

はいくのはのじから

初心を忘れた俳人のために二

その七

草子洗

俳句を続けるうちに耳にするであろうことのひとつに、「一物仕立て（いちぶつじたて）」と「取り合わせ」という言葉があります。

一物仕立て

一物仕立て、とはひとつのことについて詠みます。一気に読みおろす、といった感覚です。

例句

白桃を剥くに間合ひを計りをり／

水田光雄

*白桃を剥くということについて

烏瓜引けば真つ赤な音こぼす／

栗山政子

*烏瓜を引くことについて

ひとつづつ高さの違ふ巣箱かな／

ひらとつつじ

*巣箱について

空席に春の日を乗せ出航す／

辻 紀子

*春の出航について

セーターの編目に母の鼓動かな／

フォーサー涼夏

*セーターの編目について

本棚の隙間に寒さ集まれり／

中村勢津子

*隙間にも寒さを感じられることについて

七月の待受画面ペンギンに／

春田珊瑚

*七月の待受画面について

行く秋のギャロップの土湿りゆく／

林 薫

*晩秋の土について

初冬の畳むべきものみな畳み／

東川あさみ

*冬のはじめの畳むという日常について

坂道を春の雲へと登りゆく／

甲斐夏柑

*春の雲を近くに感じながら登る坂道について

沢蟹の水の匂ひを手にしたり／

かげやまさゆり

*水香る沢蟹について

このようにひとつのことに対して詠んでいますので、読みやすくすんなり句の意味が分かると思います。

取り合わせ

取り合わせとは、それぞれ独立したふたつの世界を、読んだ字のごとく、取り合わせて詠むことです。

この別々の世界は、作者の心・感性が介在することで、近からず遠からずの関係を築くこととなります。そのため、句の途中に切れがあることがほとんどです。

例句

くちびるに微熱癪あり／蝮蛇草

栗山政子

*くちびるの微熱と蝮蛇草

地球儀の半分は闇／神渡し

*地球（地球儀）と神渡し

夢みたる分を寝過ぎし／冬のばら

*寝過ぎした時の夢と冬のばら

千年の先の言葉や／冬桜

*未来の言葉と冬の桜

鈴虫や／壺に涙が落ちてゆき

*鈴虫と涙

にきび一つある日は二つ／冷奴

*増えるにきびと冷奴

このように取り合わせは作者の感性がよくあらわれています。

しかし句中に切れがあるからといって取り合わせとはかぎりま

せん。句中に切れのある一物仕立ての例句です。

例句

薄氷や／朝の飲食怠らず

*薄氷という春の兆しを感じる頃、朝食を毎朝きちんと食べ

ようという気持ちを詠んでいます。

島唄や／闇へ首振る扇風機

*夜が深まりつつあり扇風機をあびながら島唄を聴いていま

す。

橋越えてとまるしやつくり／鳥の恋

*鳥たちが繁殖のためにつがいを探す頃、あるいはその姿を

神戸美沙子

真田えい子

柘植史子

うかわまゆみ

草子洗

見つつ橋を渡るとき、しやつくりがとまったことを詠んでいます。

立春や／翼のごとく本開き

西川知世

*今日より春という日に、勢いよく本を開いた様子を詠んでいます。

春草や／地球ふはふはしてゐたり

細川朱雀

*春草の揺れる様子がまるで地球全体がふわふわしているように感じたことを詠んでいます。

一物仕立てか取り合わせかを理解できて、それがどこで切れているか、曖昧に切れていないか読んで分かるということは自分の句作にも役に立っていきます。

投句

自分の句がたくさん出来たら句会や結社誌に投句しましょう。いろんな人の目に触れてみて初めて自分では気付かなかったことが分かります。いい俳句を作りたいという気持ちは誰もが持っているものです。ですが、いい俳句とはどういう俳句なのか、答えはないのです。俳句は読み手の質の高さも問われますから、読者と作者で作る芸といえるでしょう。そして投句は自分が作り出した俳句を少し距離を置いて眺めることができますから、自分自身を客観的に見つめることができます。これもまた面白いものです。そして自分が作った句にいつまでも執着しないことです。だめだなと感じたり、推敲してもうまくいかな

かったり、もやもやする句はしまつて置いてどんどん新しい句を詠んでみましょう。俳句だからといって、自然の中や特別な場所に行く必要はありません。俳句を作るあなたが居て、あなたのまわりに世界がある。その世界を含めたあなた自身で、立派な句材になります。世界に季語はたくさんあります。季語を自分のものにして詠んでいきましょう。投句するたびに必ずあなたの俳句を読んでいる人がいるのです。

俳句における師

俳句をひとつの芸とするならば、師との出会いは俳人ひとりの運命を決めてしまうほど、重要なものかもしれません。

言いかえるなら俳句において、一番の上達の早道はよき師との出会いとも言えます。よき師との出会いは、各々の感性に委ねられていると言っても過言ではありません。師を選ぶのはわたしたちですから。

よりよい俳句を生み出すために、たくさんの俳句、さまざまな俳人の俳句、名句を読むということも、それはそれで非常に大切な過程ですが、自身の信じる師に出会い指導を受け、それを頭ではなく心と体でうけいれる。このことがとても大きな力をあなたの一句にもたらしてくれます。

句作に行き詰ったり悩んだりした時は、何も考えず思わず、ただひたすらに師の俳句を繰り返して読んでみましょう。その時、師の句に対して頭で考えずに心と体で感じる。心と体で感じた

師の句は、知らぬうちにあなたの句作の土壌となり、今読んだ時に分からなかった句も、時間を経てある瞬間、その句の意味を理解できる時がやってきます。理解できた時、確実に俳句を詠む力がついてきています。つまり選句の力も詠む力と比例してついてくるということです。

また句会において師と、句座を共にする仲間から助言を頂いた時は素直にうけいれましょう。「でも」「だって」と言いたくなる時もあるかと思えます。ですが、師という存在は「でも」「だって」の後に続く言葉を充分に分かつてくれた上で、厳しく助言してくれています。と同時に師は、各々の俳句からそれぞれの特性や俳句を作る力を見抜いています。その特性を大事にし、その人の力量に合った指導をしていくのです。

ただ気を付けなければいけないのは、師はあくまで師であり、依存する対象ではない、ということ。師の俳句から学んだことを素地とし、ひとりの俳人として仲間とともに楽しく句作していきましょう。

以上、はいくのはのじから、七回にわたり述べてきました。読んで頂きありがとうございます。感謝申しあげます。